

# 「腰抜け」

—初稿—

2024/3/29

脚本 太郎

〈人物表〉

ヒトシ (13) 孤児。

サトシ (13) 孤児。

高城 充 (37) 変質者。

施設長 (68) ヒトシとサトシが属する児童養護施設の施設長。二人に殺害された。

ログライン

児童養護施設の施設長を殺害し逃亡していた孤児のヒトシは、自主性がない故に状況に流されるように変質者の自宅に連れ込まれ、変質者に襲われている連れのサトシを殺害する。

ねらい

臆病者の主人公の極限状態の姿を描く。

1. 住宅街(夕)

激しく雨が降っている。

ヒトシとサトシ、二人の少年が走っている。ヒトシは不安そうに、サトシは興奮した様子で。二人の服装は汚れている。

ヒトシが前を走るサトシの肩を掴む。

ヒトシ「速いよ、ねえー」

サトシがヒトシの手を振り払う。

サトシ「うるせえな。ゆっくりしてる暇なんてねえだろうが！」

ヒトシ「急いだって、どうせ宛なんかないでしょ！」

サトシ、ハツとした顔で立ち止まる。ヒトシも立ち止まる。

2. 高架下(夕)

座って雨宿りをするヒトシとサトシ。

ヒトシ「何であんなこと、しちゃったんだろ」

サトシ「今更言っちゃって仕方ないだろ」

3. 児童養護施設・外観(夕)

郊外の中にある、やや古びた児童養護施設。雨が激しく降っている。

4. 児童養護施設・講堂(夕)

頭から血を流した初老の男、施設長(68)が白目を剥いて倒れている。片目に何かの破片が刺さっている。

近くには一部が割れた花瓶が落ちている。

5. 高架下(夕)

ヒトシ、露骨に顔を曇める。

ヒトシ「警察、もう動いてるのかな」

サトシ「さあな」

ヒトシ「これからどうなるんだろう」

サトシ、無言。鬱陶しそうな顔つき。

ヒトシ「どこに行けばいいんだろう」

サトシ、苛立たし気に顔を顰める。

サトシ「あのな、ヒトシ。何でもかんでも人に」

サトシが言い終える前に、高城充（37）が二人の前に現れる。

突然のことにビクツとなる二人。

高城は小太りでやや禿げており、不潔な服装をしている。

ヒトシ「（不安そうに）おじさん、誰？」

高城、ニツコリ笑って答える。

高城「ぼく、高城。君たち、行くところないんなら、ぼくんち

においでよ」

ヒトシとサトシ、驚愕↓葛藤の表情。

## 6. 高城のアパート・外観

古びた二階建てのアパート。激しい雨に打たれている。

## 7. 高城の自室・居間

ごみが散乱しており、散らかっている。中央にはセンターテーブルが置かれている。

キッチンで高城が鼻歌を歌いながら調理をしている。目は恍惚としていて、口から涎が一筋滴っている。

ヒトシとサトシはバスタオルで身を包み、窓辺に座っている。

ヒトシ、不安げな表情で窓の外を見ている。

サトシ、床を見つめながら思案深げな顔をしている。

ヒトシ「ねえ、あのおじさん絶対ヤバイよ」

サトシ「（不機嫌そうに）見りや分かるよ」

ヒトシ「着いてきちゃって良かったのかな……」

サトシ「嫌ならお前だけあそこに残れば良かっただろ」

ヒトシ「でも、どのみち他に行く処もないし……」

ヒトシ、視線を窓からサトシに移す。

ヒトシ「これからどうすればいいんだろう」

サトシ、苛立たし気に舌打ちをする。

サトシ「ヒトシ、てめえは本当に、何でもかんでも他人に訊いてばっかだな」

ヒトシ、悲し気に視線を窓に戻す。

サトシ「しょうもねえ奴」

×××

ヒトシ「ねえ、何でわざわざ施設長にとどめを刺したの？ あのままなら正当防衛で済んだかもしれないのに」

サトシ、しばらく無言で床を睨んでいる。

サトシ「元々、あの変態ジジイはいつか俺が殺してやろうと思っ  
てたんだ」

ヒトシ、驚いてサトシを見る。

サトシ「正当防衛だか何だか知らないけど、糞食らえだ。あのま  
まお前に横取りされたらと思うと居てもたつてもいられ  
なくなっただよ」

二人はしばらく無言で睨み合うようになる。

サトシの腹が鳴り、彼が目を逸らしたことで空気が  
少し弛緩する。

ちやうどそのタイミングで、高城が不気味に微笑み  
ながら大きめの平皿を持って歩いてくる。

高城「ぎ、できたよお。お腹すいたでしょお？」

高城、散らかったセンターテーブルに皿を置く。皿  
には焦げた肉と野菜がちぐはぐに切られて盛られて  
いる。高城がその上に二本フォークを載せる。

ヒトシとサトシは警戒しつつも、ゆっくりセンター  
テーブルに近付いてその前に座る。食欲が抑えられ  
ない様子。

高城「その様子だと、普段あんまりまともなもの食べれてない  
感じだねえ？ 遠慮せず、たーんと召し上がれえ」

ヒトシ、躊躇して食べる事ができない。

サトシ「……いただきます」

サトシは警戒しながらもフォークを手に取り、料理  
を口に入れる。

サトシ、一瞬呻く。

高城 「どう？ 美味しい？」

サトシ 「……ヒトシ」

サトシ、料理を口から吐き出す。

ヒトシ 「これ、食っちゃ駄目だ」

言った直後、サトシはセンターテーブルに置いてあった空のグラスを高城に投げつける。

グラスは高城の頭に当たって割れるが、彼は構わずセンターテーブルを飛び越え、サトシの胸ぐらを掴む。

高城 「なあんて分かったんだよお！」

高城、サトシを壁に叩き付ける。

サトシ 「触んじゃねえ、ハゲ！」

高城 「うるさあい！ 貴様にハゲの何が分かるんだあ！」

高城、サトシの首を締め上げる。

高城 「お前みたいなガキにハゲの苦しみが分かるかあ！」

サトシ、苦し気に目を見開き、咳き込む。高城の手を自身の両手で握りしめるも、ほとんど抵抗できていない。

ヒトシは驚愕の表情をしているも、座り込んだまま。

高城 「聞いているのか、オイ！ ハゲの何が分かるって言うんだ

よ、オオイ！ 小僧オ！」

高城、サトシの身体を何度も壁に叩き付ける。

サトシ、苦悶の呻きを漏らしつつも、ヒトシに目で合図を送る。ヒトシは動かない。

サトシ 「一人も二人も同じだ！ 殺せ！」

ヒトシ、飛び散ったグラスの破片を一瞬見て、サトシに視線を戻すと、ゆっくりと首を振る。

サトシ、失望の表情。

高城、床に落ちていたビール瓶を掴む。

高城 「お前も毛根を失う悲しみを思い知れえ！」

高城、ビール瓶をサトシの頭に叩き付ける。ビール瓶は割れ、サトシの血が飛び散る。

高城 「これが喪失の痛みだあ！」

サトシ、前かがみになった高城の髪を掴み、思いき

り引っ張る。

高城 「うおおお、やめろ！ 禿げるう！」

サトシ 「手遅れだっつーの！」

サトシ、ヒトシを見て叫ぶ。

サトシ 「ヒトシ！ てめえは、このハゲ以下のクズだ。今際の際にならない限り自分の意志で何もできない腰抜けめ！  
一生そうやって縮こまってる！」

ヒトシ、奇声をあげてガラスの破片を手に取り、駆け出す。

ガラスの破片がサトシの右目に深く突き刺さる。

サトシが目を見開き、身体から力が抜ける。

ヒトシがサトシの目から破片を抜くと、血が噴き出す。

高城が驚いてサトシから手を離し、サトシは壁にもたれた状態で頽れる。

茫然とした高城の首筋を、ヒトシが振り返り際に破片で抉る。勢いよく血が噴き出す。

高城が傷口を押さえ、サトシの上に倒れこむ。

返り血を浴びたヒトシが、動かなくなったサトシと高城を、清々しそうな表情で見つめている。

終